

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2490400062		
法人名	株式会社シルバーアシストのぼの		
事業所名	グループホーム白鳥		
所在地	三重県亀山市能褒野町82-1		
自己評価作成日	平成 28 年 10 月 1 日	評価結果市町提出日	平成28年12月7日

※事業所の基本情報は、介護サービス情報公表システムページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaisokensaku.jp/24/index.php?action_kouhyou_detail_2016_022_kihon=true&JigvosvoCd=2490400062-00&PrefCd=24&VersionCd=022
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	社会福祉法人 三重県社会福祉協議会
所在地	津市桜橋2丁目131
訪問調査日	平成 28 年 11 月 10 日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

温かい笑顔、優しい気持ち、わかりやすい言葉をモットーに接することを心掛けている。
管理者をはじめ職員は全員女性で、女性の利点でもある笑顔、気配り、優しさを心掛け、利用者がその人らしい生活が送れる支援を行っている。
職員はヒヤリハットを積極的に活用し、情報共有に努めている。また積極的に研修会に参加するなど介護技術の向上、知識の習得にも力を注いでいる。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

地域からここにも福祉施設ができたらの強い願い、思いに応え、看護師の資格を有する管理者が家族の支援のもと、1ユニットのグループホームを開設して6年が経過した。現在の利用者は介護度4.5の重度化した方である。管理者のリーダーシップで職員が一体となった介護が実践されている。石楠花に囲まれた建物の片端に自家菜園畑があり、大根が作られている。そこにつがいのメジロがきて静かな環境の良さを感じる。玄関に著名な書家によるすばらしい筆さばきの表札と赤い丸ポストが目を引き。運営推進会議に職員が交代で意見発表をする機会をつくり、ユニークで先駆的な取り組みをしている。朝、職員は出勤したら、利用者一人ひとりと握手をして、元気な声で挨拶するのが日課で、体を触れ合うスキンシップは、利用者のその日の調子を判ずる効果がある。
--

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	「温かい笑顔」「優しい気持ち」「わかりやすい言葉」を私たちのモットーとして、職員全員で理念を共有し、笑顔の絶えない職場づくり、利用者の立場に立ったサービスを心掛け、実践している。	理念は職員間で共有し、さらに今年目標として「気づき」「あいさつ」を意識して、利用者本位で介護を実践している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	管理者(事業者)、職員の多くが地元なので元々地域とのつながりは深い。地域ボランティアの方のショーなどでは近隣のお年寄りにも声掛けを楽しんでもらっている。子どもSOSの家にもなっている。	管理者・職員が地元であり、地域・近隣の方とのつきあいは良好で、野菜を届けてもらうことも多々ある。また、小学生の通学路にもなっており、帰路にはホームへ立ち寄ってトイレを借りる小学生もいる。事業所主催の運動会に地域の方の参加がある。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	自治会長、市議、老人会長、民生・児童委員など地元の方に運営推進会議のメンバーになってもらっており、地域へ認知症への理解を深めるよう発信している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	ホームでのありのままの生活・活動を報告し、参加者から助言協力をいただき、サービス向上に生かしている。また、職員の研鑽の場として、自らがテーマを決め、会議で発表している。	参加者は、地域の方始め、家族・利用者、さらに駐在所からなど多彩である。会議の場を利用して、職員が自らテーマを決めて発表を交代でする取り組みは先駆的である。いろいろな意見が活発に話され、運営に活かしている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	亀山市高齢障がい支援室、鈴鹿亀山地区広域連合介護保険課の担当者とは日頃より連絡を密にし、運営の実情を伝え、助言指導をいただくなど、協力関係を築いている。	広域連合の担当者にはわからないことを聞き、助言指導を受けて関係は良好である。最近では、障害者の扱い方等で度々助言をもらい、介護に反映させた。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	職員は禁止対象となっている身体的拘束や利用者の行動を制限する行為を理解し、拘束しないケアに取り組んでいる。年4回、身体拘束委員会を開催している。	入居時、病院から退院直後で抑制服を着た利用者がみえ、抑制服は拘束になるのではないかと職員で話し合い、その着用を中止した事例がある。身体拘束委員会があり、拘束の弊害については全職員で理解・認識をしている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	心理的虐待にならないよう職員相互で注意・話し合い、防止に努めている。研修等に参加して学んだことをカンファレンスで発表し、全職員が理解し防止に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	職員会議で勉強する機会を持ち、法律・制度を理解し活用できるよう努めている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約の締結、解約、介護報酬改定の際はよくわかるよう十分説明し、理解納得を得ている。入居後でもわからないところは、いつでも質問してもらい答えている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者、家族とは日頃より良い関係を築けており、話し合い、理解協力をいただいている。玄関ホールに意見箱を設置しているが、直接話をされることがほとんどである。	利用者・家族ともに運営推進会議に出席し、意見表出をしている。また、家族会が年1回開催され全員出席で交流をしている。家族の面会時には利用者とのスキンシップを促し、触れ合う大切さをさり気なくサポートし、家族からの信頼は厚い。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月1回職員会議を開催して、意見や提案を出し合い業務改善に努めている。従業員同士が家族的でいつでも何でも言える雰囲気でのコミュニケーションをよくとっている。	月に1回、職員会議を開催し意見交換をしている。管理者は努めて現場の介護に加わり、職員とはいつでもなんでも話ができる。職員の離職がほとんどないのも働きやすい職場といえる。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員の希望を取入れて勤務表に反映できるよう、勤務形態に無理が無く、やりがいがある明るい職場環境を保つよう整備に努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	代表者は他の職員とともに現場に入り常に接している。職員を外部研修に参加させ、カンファレンスや運営推進会議で報告発表することで、スキルアップを図っている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	同業者の開催する講習会へ参加するなど交流を図っている。地域密着型サービス事業所連絡会の研修にも参加し、より広く交流する機会を得ている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前には本人・家族と面談を行い、関係づくりに努めている。実際、本人から問題点を聞き出すのは難しいことだが、ケアマネジャー、家族からの聞き取りをもとに、声掛け傾聴を繰り返して信頼関係を築いていく。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居初期は本人同様家族にも不安戸惑いがあるので、要望に耳を傾け不安を和らげ、職員がやることと家族にさせていただくことを話している。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	契約(入居)前に家族、本人の要望を把握し、本人のために最もふさわしいサービスを考える。本人のために良ければ家族とも話し合い、他サービス利用を勧めるなどの対応をしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	自分でできることは少なくなっているが、人生の先輩として敬い、自宅のように穏やかな気持ちでいられるよう接している。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	面会時には、本人の日々の変化など、些細なことでも家族に伝えている。家族には、職員も一緒になって入居者とゆっくりと会話のできる場をつくっている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	本人の楽しかったこと、思い出話などに耳を傾け、心の中での関係が途切れないよう支援に努めている。馴染みの方の訪問時などでは、表情も明るく生き生きとなり、職員も一緒に仲間に入って会話をする。	系列のデイサービス利用者と友達で交流が続いている。話を聴くことで、思いを共有している。利用者のきょうだいを職員が迎えに行き、一緒に過ごしてもらうような支援もした。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	日中を皆が居室よりリビングで過ごすようにしている。体操、歌、ゲームなどレクリエーションを一緒にやっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	在宅へ戻った方へは適宜訪問したり、他サービスへ移行した方については、本人のケアマネジャーと連絡を取るなどしてフォローする。医療機関へ移った方とは家族とも連絡を取り支援に努めるなどしている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人の希望を聞いて、また本人から聞けない場合は家族から聞いて、希望に沿って楽しく暮らせるよう努めている。	入居時にセンター方式で聞き取った情報をもとに、利用者といろいろな話をしている。毎日接していると、顔つき(表情)や動作、手の動きなどから思いを察知できる。基本は、話を聴くことにつ	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	家族から、これまでの暮らしの様子や、好み、仕事、性格など生活歴を聞き取り把握し大切に、本人との会話や介護に反映している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	一日の過ごし方はそれぞれの意思を尊重しつつ、見守り、声掛けなどで現状の把握は日々注意深く行っている。日報への記録、毎日の申し送り引き継ぎ共有し、状態の変化に速やかな対処に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人、家族等との聞き取り、話し合い、また毎月のカンファレンスや、必要に応じサービス担当者会議を行い、介護計画を作成している。	月に1回、職員でカンファレンスをしている。家族の意向をふまえ、介護支援専門員が計画書を作成している。計画書は全員の分を1冊でファイリングして、毎日、目標について出来たかどうか○×でモニタリングをして、3か月ごとに見直しをしている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の様子をカルテに記入し、気づきや特記事項など、カルテの情報を共有している。カンファレンスで介護の問題点を取り上げ、意見を出し合い改善している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	本人の体調が悪くなり、家族の都合がつかないときなど、管理者、職員が病院への付き添いを行っている。 デイサービスとの合同レクリエーションなどの企画も行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	現在は皆、要介護度が高く外出は難しい。窓からの景色(バルーン、花木、農作物など)を楽しんだり、ホームの運動会には地域の方に参加していただいている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけ医で受診を行えるように家族の協力を得て支援している。現在は入所9名中8名のかかりつけ医は町内の協定医である。	近隣の開業医が協力医療機関で、全員がかかりつけ医である。管理者が看護師資格を有し、医師との連携はスムーズである。受診は家族とともに職員も同行して行っている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	代表者(管理者)が看護職の職歴が長く医療知識がある。職員は日々の気づきを共有し、管理者との連携で早く適切な受診を受けられるよう努めている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	救急搬送、入院時には病院まで職員が付き添い、病院、家族との情報交換を行っている。家族の相談にも努め、退院後の看護に反映させている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入所時に、重度化した場合や終末期のあり方について、説明と家族の意向確認を行っている。終末期には再度意向を尊重し、ターミナルケアに取り組んでいる。	利用開始時に看取り意向確認書を交わしているが、実際にその状態になったら、家族、医師との話し合いをして、希望に沿った終末期の支援を行っている。現在の利用者は介護度4、5であるが、きめ細かい介護を実践してホームで安らかな生活を送っている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	AEDの取り扱いなど、すべての職員が応急手当や初期対応ができるよう、訓練の機会を設けている。消防本部主催の普通救命講習を受講している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回の訓練(市の消防参加と自主)を計画的に職員入所者全員参加で実施している。指定避難場所である小学校までのルート安全確認訓練も実施。また、当施設での受入れも想定している。	災害訓練は消防指導の下、さらに自主訓練を実施している。いち早く火災報知設備を取り付けて緊急通報に備えている。備蓄もあり、災害時には地域の方の受け入れをする旨、自治会長に伝えている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	居室・トイレ入室時のノック、声掛けの励行やトイレ誘導時など常に丁寧な言葉で話しかけ、接するようにしている。	自分がされて嫌なことはしないと職員に徹底している。おむつ替え、入浴などプライバシーに関わる行為は特に配慮を心がけている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日常の会話を通して希望や思いをくみ取り、言葉でできない方は表情で汲み取り、できる限り自己の意思での行動ができるよう努めている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	それぞれのペースに合わせた暮らしをしてもらい、できる限り無理やり押し付けることの無いよう心掛けている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	男性は毎朝髭剃り、女性は髪の毛のブラシかけなど、清潔な身なりや好みのオシャレを楽しめるよう支援している。また希望者には2ヶ月に1回出張理容(美容師)で整髪してもらっている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	季節の野菜や旬の食材を用い、細かくきざんだり、柔らかくしたりなど、個々の状態に合わせた調理の工夫をして食事をたのしんでもらっている。後片づけ盆拭きなどは一緒に手伝っていた。	介護度が高く、利用者全員がミキサー食のとりみをつけてある。全員が大きめのお椀を使い、スプーンを使って自力で食事をして、自分が出るところは自分でする残存能力を引き出す支援を実行している。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事は介護職コーディネーターが献立を作成し、一人ひとりに合わせた量と内容を工夫してバランスをとっている。また水分補給はたえず行っている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎日朝と就寝前に 自分でできる方は自身で、できない方には介助をして、必ず歯磨き、うがいを行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	現在は要介護度が進み、全員おむつ使用になっている。排泄チェックシートを活用したりリズム、パターンの把握でタイミングをはかりできる限りのトイレでの排泄、自立支援をしている。	全員オムツ使用で、現在は立位が出来ないためトイレでの排泄は難しい。排泄チェック表を活用し、パターンの把握と臭いで察知している。便秘は本人が不快であり、摘便をし排泄を促している。毎朝、清拭をしている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	食事の工夫と水分摂取、軽い運動、入浴時の腹部のマッサージなどで予防に取り組んでいる。また、必要に応じ内服薬で対応している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	本人の体調、希望に合わせて入浴を実施。入浴に際しては、一人づつ、ゆっくりとくつろいだ入浴タイムになるよう声掛けしながら介助し入浴してもらっている。	週2回の入浴で、入浴介助は、2人ないし3人で行っている。脱衣場に特注のベットサイズの大きな椅子が置かれ、ゆったりとしたスペースになって脱着がスムーズにできる支援がされている。入浴をしない時は、足湯をしてマッサージをし、体調のチェックをしている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	昼間をできるだけ起きて過ごしてもらい、夜は安眠できるよう支援している。また昼食後は本人の希望に添って休んでもらっている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	医師との連絡を密にし、服用する薬の変更があった場合の本人への影響、変化など、理解に努めている。服薬ミスを起こさないよう、ダブルチェックを行っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	誕生会や季節の行事で楽しんでいただいている。コーヒーや、酒・ビールを飲んだり、テレビ・歌・散歩など、ささやかながら気分転換を図れるようしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	遠方へは体力的に難しいので、陽気の良い日は周囲の散歩や畑の作物の鑑賞、収穫、花見など行っている。	天気の良い日には、管理者の自宅まで散歩に出かけている。かかりつけ医の医院も近いので受診に行くのも外出支援の一環になっている。介護度が高く、無理をして出かけるより、ホームに居ながらにして周りに咲いた石楠花などの花見も出来る。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金は個人で所持してもらっていない。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	家族とは面会時にゆっくりと親子の時間を過ごしてもらっている。電話は職員が家族にかけ本人と代わったり、手紙は本人に書いてもらい面会時に渡したりしていたが、現在はそのような状態ではない。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	自然豊かな場所に立地し、共用空間は余裕ある広さでゆったり快適に過ごせる。台所はオープンでお互いの顔が見える。フロアは自然光、風が入り四季を感じる。	全体にきれいに整理整頓が行き届き、落ち着きを感じる。洗練された絵画や書が飾られて、リビングの天井部分の一部に青空をイメージした明るいクロスが貼られている。床暖・やさしい色合いのソファなどに心配り・配慮が伺える。季節によってテーブルやソファのレイアウトを変え、居心地の良さを工夫している。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	3人掛けソファなどで、それぞれがお気に入りの好きな場所で日向ぼっこをしたりして過ごせるよう工夫している。独りになりたいときは居室に戻るようになるが、昼間は大半をリビングでゆったり過ごしてもらっている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	布団、枕、茶碗、箸、その他日用品、時計、家族写真など、使い慣れたものを持参して自宅感覚が持てるようにしている。クローゼットがあり部屋を広くすっきりして使っていただいている。	各居室にクローゼットを配備し、衣類などの身の回りの物はそこで整理整頓がされて、居室内はシンプルである。ゆとりのあるスペースがあるのは、車椅子での移動、、さらには緊急時の対応にもよい。布団・枕は自宅で使っていた馴染みの物である。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	転倒時に備えた柔らかい床材や手摺など施設の安全面の配慮はとっている。		